

続 宇治川夜話

(済美寮編終稿) 黄旗亭

(7) 中山手済美寮

本店傘下の済美寮は「オリビヤ」に初まって中山手寮で幕を閉じた。この二つの大きな宿舎を主軸にして大小幾つかの寮が市内や近郷に分布されたのは前に述べた通りである。当然の事乍ら鈴木商店の終焉と共に姿を消して今はもう跡方もない。將に国破れて山河ありである。歴史と云うには余りにも短い期間であっただけに数少しい思は却て鮮明に記憶に残る。其処には自づと醸成される寮風と伝統と友愛が若者達の胸底深く刻み込まれて青春の哀歎は終生忘れ去る事がないであろう。その消えがての灯に油を注いでくれたのが「辰巳会」であるのは言を俟たない。

大正十年、海岸通り十番地に待望の白亜の城郭が竣工して宇治川のバラックから本店が移動する事になった。その頃、相前後して中山手七丁目に木の香も新しい二階建四棟の寄宿舎が新築落成した。堂々たる中山手済美寮である。

鈴木商店勃興の過渡期に入店した若者の大群は既設の宿舎に溢れんばかりになり建物の増設が後手々々に廻った。大学出、中学卒、見習員等が各一団づつグループを形成して居たが、その一団づつがあらへやられ、こちらへやられ、仮のねぐらを渡り歩かねばならぬ様な事もあった。

一頃、焼ける前の本店建物(旧ミカドホテル)の三階にも数十人が入り代り立ち代り起居した事があったが焼け出されてからよん所なく二人三人と組んで市内に下宿生活をする者が相当数あった。今と違って至る所に下宿屋があり、仕舞た家が間貸しをして呉れるので、中には趣味の様に転々と下宿を替える者もあった。それ等をも併せて中山手の寮は漸く独身者の散在を一纏めにする事が出来て一先づこの悩みを解消する事が出来た。恐らく人事係も教育係も庶務も大変な事であつたらうと思ふ。即ち布引オリビヤは独身店員と古参株の見習員を主体に収容し、中山手新寮には大正五、六年以降入店の見習店員が主に入れられた。この大別した二つに教育係がそれぞれ監

督指導の任に當った。筆者が仮寓した柳田済美寮も之を機に柳田家へ返還、その一群は中山手へ併呑される事になり私としては又々五度目の移転をする事となる。

(8)

さて中山手は二百名近い大世帯にふくれ上り、当座は各グループ群の寄り合い世帯の如き様相で一寸した對抗意識の様な空気が熾ざしたが間もなく霧散して一同は中山手の住人と云う誇りにとけ込んで行った。

舎監は吉川格氏、教育係の次席でオリビヤは高橋行次氏が担当、双壁をなして居た。寡目重厚、ゴマ塩の口髭を蓄え謹厳そのものの如く一見近より難い様に見えたが、全くその反対で頗る温情に富み、物腰柔かく大きな声で物も云わぬ風の人柄であった。稀に見る子福者で男子だけでなく七人、女の子も何人か居た様に思ふ。吉川さんと云えば思い出されるのがその頃流行した「自強術」と云う烈しい体操で、朝夕十分程だが集會室の広間で号令一下やらされる。寒い朝やぎりぎり迄寝たくてたまらない身にはつらさと億劫でうんざりした。それでも教育係に横着者と睨まれるのがこわさに三回に一回はしぶしぶ出席した。私は氏の三男で當

(9)

本店で一日の勤務が終わると大食堂で夜学が始まる。見習員の低年齢層が対象で、英語、簿記、算盤、商事提

要、漢文等が毎夜二時間程施行される、それが済まぬと寮に帰れない。茲でも入店年次別に組を編成、仮に一年生、二年生、三年生と云う具合に階層がある。学期末には成績表が各部の主任の手に到達されるのでいやが応でも勉強と競争意識を狩り立てられる。その上熱心なのが元町四丁目の女子商業の校舎で施行される朝学にも通い出した。筆者も乗りおかれては一大事とばかり心ならずもその列に加わりチョイスのリーダーに振り廻された。店員に昇格する日の重大な考查資料になると聞かされて居るので中々気をゆるめる訳には行かぬ。そうした夜学でしょぼつかせて居た目が生返った様に輝き出すのが寮に帰ってから寝るまでの貴重な自由時間である。十時頃になると吉川さんが全室を見廻って「皆寝たか、まだ帰って居ない者はないか」と点検に廻られる。さあ、それからだ！下心のあるのが誰からともなくも一度起き出してごそごそやるのである……。

宵の中、百人一首や、碁、将棋をやって居る間はよかった。何時、何処から、誰が持ち込んだのやら「八・八」が流行し出したのである。花合せの三人でやる例のややくさい奴

である。あつと云う間に全寮を風靡してあちらの部屋でもこちらの部屋でもシャツ、ねぢ鉢巻でおそくまで止めない。勿論、賭博嚴禁の時代で金銭をかける様な事はなく、単に碁石をやり取りするのみの至極他愛のない遊びだが、その面白さは丁度現今の麻雀を始めとおぼえた様な熱中度に匹敵する。病みつきの時節がしばらく続いたがやがてはそれも潮の引く様に段々下火になって行った。

四棟の建物に取り囲まれた中庭には間もなく久琢磨、井上清等の肝入りで四本柱の土俵が築かれた。春から夏にかけて朝夕稽古が初まる。相撲部のレギュラーが泊り込みで一般見習員にも奨励するので否応なく狩り出され、兎にも角にも相撲熱は勃興の一途を辿った。この頃は前に「相撲人国記」に述べたので省略する。

こうした大勢の若者が交錯する人間図絵の中には粗野な者、女性的な者、勉強家もあれば運動好き、音楽趣味、登山家等種々雑多である。その頃の新語に硬派、軟派と云う言葉があるが、此処では巷で云う不良的な意味合いは少しもなく大別してこの二つの型に当てはめられる様な流

れがあった。云うなれば前者は真面目一徹、朴念仁の堅物か、後者は多少都会づれがして生意気が身についてきた位の者か、何れにせよその軟派の総大将とも云うべき型破りの異色人が出現した。今は異金属の社長で納って居る宮永(旧姓河合)勉である。

(10)

何う云う訳か、何時の頃からそんなか河合は無類の芝居極道で、とうとう見るだけではあき足らなくなり、自分も実演して見様と謀叛を起し寮の同志をかたらして準備に乗り出した。今なら演劇同好会とも云わうか当時劇作文学の拾頭期で純文学の一部門は創作戯曲があり、菊池寛、久米正雄、谷崎潤一郎等の名作が脚光を浴びた頃である。「父帰る」「地藏教由来」「お国と吾平」等の代表作が素人仲間でも盛んに手掛られた。河合は野望止み難く遂に一団を結成、舎監に頼み込んで集會室の使用許可を得、名ばかりだが舞台をもこしらえて熱心に稽古に取りかかった。現代物から初めたので衣裳には余り苦勞はなかった様だがそれでも役そこそこ鬻(かす)を手廻し道具立てには絵幕を用いる等苦心の跡が見えた。正直云って最初は彼の熱意

時既に他家へ転籍した奈古三郎と特別に親しく彼の音楽の造詣に深く傾倒したものが二人して「親父さんの自強術だけは何とかならぬものか」と陰口をたたいてこぼしたものである。

その広間、食堂兼集會室は二十坪あまり、畳敷にして四、五十枚も敷かれる程の大ききで色々な集りに利用された。一番印象に残るのは何と云っても茶話会である。教育係の主催で月一回、高橋、吉川、宇津木の諸氏が列席して「金つば二個、格子せんべい五枚、南京豆やみかん」等が配られて皆が隠し芸を披露する。この夜だけは固苦しい訓話も短かく無礼講の様にはしやぎ廻った。全寮員一度に集めてやる事は出来ないの所謂年次別入店群に組分けされた。私等大正七年入店の組は茲で初めて「午鈴会」と称して名乗りを上げた。その歳「戊の午」に因んだ名である。五十年の今、辰巳会の別動体として分子会として、そして若手の錚々として緊密なる交友の下に活動を続けて居る。

本店で一日の勤務が終わると大食堂で夜学が始まる。見習員の低年齢層が対象で、英語、簿記、算盤、商事提にはだされた好奇心半分つき合い半分でメンバーに加った連中も次第に彼の演出に引き込まれ回を重ねる内には一座の意気込み当る可からざる様になった。將に病膏盲と云わんか、其の名も「山手ドラマ研究会」と称して、お定まりの先づ寛の「父帰る」が上演の運びとなった。集會室は後援派や、やっかみ派も加えて押すな押すな盛況である。主役賢一郎には河合が、父惣太郎は名古屋支店帰りのしたたか者阿江清、母は女形小倉五郎、弟新二郎に熊田、妹は姫野と云う配役で義理にも上手とは云えぬが或る意味での面白さで大成功であった。「時の氏神」の時は相楽栄作に河合、妻には女形専門になった小倉五郎、仲裁役の友人に田中植造(旧姓藤島)。他に山本有三の「嬰兒殺し」等をレパートリーにして居た。恐ろしい物で、彼が本店麦粉部に在勤中数度に涉つての上演が何うした偶然か、お家さんの耳に這入り、或る日中山手の寮へこれを見んものとお越しになった事があった。——私は今でも、あの時は何かの御用で、中山手へお家さんが立寄られたので好機逸す可からずと御覽に入れたのではないかと云うと彼等は一語の下に否定して、お家さんが

態々見度いと云って下さったが為に
当日は赤い毛布を敷いて特別の御席
を用意したものだ、その証に、

「お家さんから大変な賞讃を拍
し、奨励の意味をこめて金一封(五拾
円)を頂いたと云う。五拾円は大金
である。それにもましてお家さんの
讃助を捷ち得た事で座員の意気は虹
の様に輝いた。話が当時の思い出に
至ると宮永の気焔は止る所をしらな
い。今でも三度の飯より芝居が好き
で、辰巳会の席上では歌舞伎新劇を
問わず嘗っての名優の名調子をよく
聞かせて呉れる。その声色はも早や
素人芸の遊びではなく、その芸域の
広さも旦那芸の道楽だけではない。
云うなれば中山手時代からの年期の
入った大名題である。余談になるが
前回「たつみ」十三号の巻尾に名古
屋支店の演劇写真が掲げて居る。

「白浪五人男」に扮した伏見俊助、
田原保三郎、松本勝也、久保弥三郎
藤原長司の諸氏である。正に珍稀中
の珍品、矢張り五十年昔の絶品であ
る。辰巳会にとっては宝物級である
う。

(11) 中山手済美寮を構成する少年群は
大体十六、七才から徴兵検査前の二
十才位迄が主である。その中堅層か

グラード、モスコ両歌劇団百余名
が来日して聚楽館で本邦最初の本格
オペラを公演した。「カルメン」
「トラビアタ」「アイダ」「ファ
ウスト」等である。筆者は大規模な
本格芸術に圧倒されて呼吸もつまら
んばかりであった。ブルスカヤ、グ
セヴォア、オシポワのボリュエ
ムには唯呆然とするばかりであっ
た。

或る日曜日の朝、山本通から諏訪
山にかけて一群の外人達の行くのに
出会った。多くの外人を見慣れた目
にはさして珍らしくもないのだが、
この人達の派手な華やかさには目を
見張らせられた。私は何とはなく済
美寮へ帰りそびれて見るともなく一
行の動きに目を注いで居たが、持物
にロシア字が書かれてあるのに気付
いてこの人達はモスコ歌劇団の面
々ではないかと思つた。武徳殿の近
くにある大きな邸宅へ吸い込まれて
行つたが後姿にはのかな憧憬の思い
を送つた事を憶えて居る。何かの
折、不図その頃に聞いた曲を耳にす
る時、オリビヤ、柳田、中山手の各
済美寮で過ごした日の遠い昔に思い
を馳せるのである。つらかつた事、
悲しかった事もあつた筈なのに不思議
と楽しかつた事はかりに連がる。

ら年長組にかけての者はそろそろニ
キビが気になる年頃でひそかに美顔
水ホーカー液等を用いたりチックを
愛用して見たり、中でひどいのは内
証でたばこをふかす者等があり、早
熟組が何かと啓蒙してくる。と云
つても現今とは凡そ程遠い真面目で
厳格な時代の事、する事が至って無
邪気で幼稚で勿論清々しくもほほえ
ましい。寮の門を出ると直ぐ中山手
通りに出る。その頃、市電はまだ開
通して居なかつたが神戸を代表する
大道路の一つである。丁度、宿舎の
真下辺りになる通りの南側に「満
月」と云うしるこ屋があつて、もう
一軒、その横を南へ下ると細い露路
を西へ這入った所に「戸里」と云う
のがあつた。二軒共、関西風でぜん
ざい屋である。今ならさしづめ喫茶
店と云う処か、何時しか寮生の大半
が一番のお客になつて居た。何しろ
「鈴木」である。ぜんざい屋処か神
戸市中何処へ行つても肩で風をきる
様な羽振りが利いたものを、もてて
当り前である。両軒共、月末勘定の
「つけ」の客が寮の中に大分居る
「戸里」には若い娘さんが居てこの
方のお目当客も可成り居た。「戸
里」の常連は皆、アルトハイデルベ
ルヒのカール王子の様な気になつて

五十年の夢は消えず、夢に夢を積み
重ねる事こそ我等に与えられた貴重

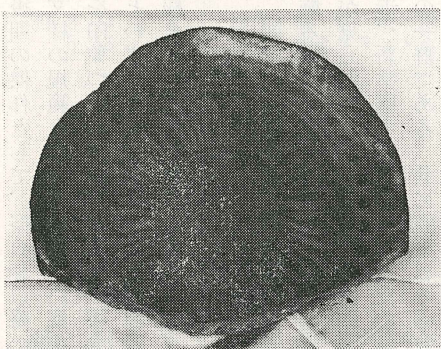
白鳳の瓦

(たつみ十二号から続き)

▽白鳳前期の瓦

(法隆寺式軒瓦)

法輪寺では鏡瓦・宇瓦とも、同様
の文様ながら、さらに繊細鋭敏な感
覚がうかがわれ、宇瓦の裏面に池
上、木、井上等の刻印を押した瓦師
の心意気が感じられる。法隆寺式軒
瓦は東は長野善光寺、愛知元興寺ま
で波及するが、分布の中心はむしろ
西にあり、中国、四国、九州各地に



春の宵の一刻を楽しんだ。丹野甚之
助、田庭伊太郎は私等午鈴会の中で
も特に眉目秀麗、丹野は体軀抜群、
田庭は全身の斗志と云う何れ劣らぬ
好青年であつた。この二人が猛烈に
ケティーならぬ娘さんに肩入を初め
た。私等は指をくわえて引き下がる
より他仕方がない、到底二人の男前
には歯が立たない残念乍ら脇役に甘
んじなければならぬ、初めの間は二
人の友情にまで響く事はなかつたが
段々後へ引けぬ様になつてくると一
触即発の危機もなしとは云えない。
茲に一人、世話焼で出しゃ張りです
の癖妙に人望があつて午鈴会のリー
ダーシップを持つ橋本(旧姓植野)
賀一郎が、これをほおつてはおけぬ
とばかり頼まれせぬのに割つて出
て二人を呼んで男らしく結着をつけ
様と骨を折り出した。後で聞いた話
だが何でも「ジャンケン」で優劣を
定めたとか云う。恐らくは振り落さ
れたやっかみ屋の陰口だとは思
うが、兎に角三人三ツ眼で頗るフェア
ーに解決し、丹野に軍配が揚が
落着した。後の丹野夫人その人であ
る。田庭は後に望まれて就職先の社
長令嬢と結婚、幾干かの歳日を経て
兩人共今は亡い。華やかな、そして
哀愁を帯びた淡い中山手ロマンスで

な夢である。

及んでおり、とくに九州では奈良朝
以降まで継承されている。

▽白鳳後期様式の瓦(一)

(葡萄唐草文)

葡萄唐草文といえは、誰でも先ず
奈良薬師寺金堂本尊の台座を思いお
こすであろう。風になびく葉やつぶ
らな実はまさしく異国の香りであ
る。それは連珠文と共に、唐文化を
仲介してもたらされたペルシャ西
域文と共に、唐文化を仲介にしても
たらされたペルシャ西域文様であ
る。

岡寺の旧址は、こうした葡萄唐草
文をかざり宇瓦の出土でとくに著名
であるが、その他は奈良盆地南部の
ごく僅かな例と、大阪太平寺の鴟瓦
と系統を異にする静岡日吉庵寺のも
のしか知られていない。

岡寺を最古例として加守寺までお
およそ五種類の展開を見せるがそれ
は白鳳時代終末期のみ見られる美
しくはかない意匠であつた。これに
伴う鏡瓦は、複弁五葉または六葉

あつた。うたかたにも似た多くの話
題が寮を中心に渦を巻き、その渦紋
の果を湧いては消え、消えては湧
き、歳月が果てしない律動を押し流
して行く。

(12) 終章

誰かが黄色い声を張り上げて、
「恋はやさしい野辺の花よ！」と唄
つて居る。「城ヶ島の雨」の哀調が
若者の感傷をかき立てる様に流れ
る。川口章吾が青年会館でハーモニ
カの演奏会を開いた。その曲目「ダ
ニュープ河の漣」「スイートホー
ム」のバリエーションは驚異的な反
響を呼んでハーモニカ全盛の時期が
来る。音楽程、時代の思い出を切実
に喚起して呉れるものはない。その
時期、その時代に印象づけられた歌
曲やメロディーは今でも遠い昔の思
い出を彷彿として運んで呉れる。宝
塚の少女歌劇に随喜の涙を流して居
た私等の幼稚な音楽趣味も追々脱皮
して行つて国際都市神戸の持つエキ
ゾチックな感覚に没入して行つた。
折しも山田耕柁が母校関西学院で欧
米帰朝第一回の発表音楽会を開い
た。青年楽人山田耕柁は自らシユト
ラウスの夜曲を弾き、又自らの作曲
した露風の「古里の小野の木立」を
詠唱した。同じ年の秋十月、ペテル

蓮華文で、周縁は幅広く、大きな波
紋をめぐらす、それは宇瓦の波文
と対応するものである。

▽白鳳後期様式の瓦(二)

持統文武両朝の造営になる藤原宮
や本薬師の瓦は鏡瓦の蓮花文の廻り
に珠文帯と波文帯を二重に飾る豊か
な意匠であり、宇瓦にもこれに対応
して上縁に連珠文、左右両縁と下縁
には波文を配するいわゆる天星地水
文帯の中に水波紋のような通行唐草
文をあらわしている。通行唐草文は
右行と左行の二種類があるが、薬師
寺式ではさらに小さなC字形を加え
て複雑である。鏡瓦には外縁と内縁
の二重文帯、宇瓦と周縁が文様帯と
なる。この装飾性が白鳳後期を特
徴づけ、地方もまたこの新様式の到
来を待って白鳳時代をおわるのであ
る。藤原宮の鏡瓦は四種十五形式に
分類される。その変遷は周縁の拡大
と蓮花文の萎縮形式化である。宇瓦
は二種七形式の扁行唐草文、扁行忍
冬唐草文および装飾重孤文などから
なり、扁行唐草は周縁の天星地水文
が連珠文帯一色へと変遷する。陰隈
寺の瓦は藤原宮式を範としながら独
特な文様に特徴があり、地方にあつ
ては九州太宰府系の瓦は謹厳であ